

昭和二十九年七月二十五日發行(毎月一回・十五日發行)
第三種郵便物認可

(通第六六号)

慈

光

目 次

滅度を示現し給ふて……………	花田正夫……………(1)
大經上卷全体の感じ……………	福島政雄……………(5)
愚禿のころ……………	白杵祖山……………(7)
信に生き信に死した人……………	長谷顕性……………(10)

第六卷

第九號

滅度を示現し給ふて

花 田 正 夫

去る八月六日は近角常音先生の一週忌でありました。また来る十一月八日は池山栄吉先生の十七回忌をむかへます。私自身、両先生から蒙りました洪恩慈育の程は申すもおろそかなことでもあります。罪障の深く重い私の五十年の生活に、時に嚴父の如く、時に悲母の如くあらはれて下され、或は慘怛たる罪業の荒野に降り立つて下され、或は涯てしない卑屈の泥沼に慈愛の御手を垂れ給うて、照し、護り、温め、擁めて、本願の大悲を涸渴の身に灑いて下さり、名号の燈炬を暗黒の身に掲げて下さいました。

嗚呼、然し恩師すでにゐまらず、年とともに恩愛思慕の情いよいよ切に、腸を断つものがあります。然も恩師におくれ残る我が身の孤影道然たる姿を顧みる時、年すでに知命を過ぎ、身すでに痼疾、風葉の身、朝露の生命をしみじみと感ずるのであります。

ことの出来ない、絶対の佛智のもつ不可思議の德音であります。このことについて法華經の中心とも申すべき寿命品に説かれてゐる『良医の譬』は、この佛意の深き思召しを懇切に教へられるのであります。

良 医 の 譬 喻

或所に非常に智慧のすぐれた立派な医師が住んで居りました。彼は医術と薬物に長じて、如何なる病でも治癒し得る腕前を持つて居りました。彼に多くの子供があり、十、二十、乃至、百をもつて数へるほどでありました。

或時、この父なる医師が、とある用事で遠い他国に旅して、久方振りに我家に帰りました。ところが驚いたことに留守中に子供等があやまつて毒薬を飲み、そのために劇しく苦悶して地上をころけ廻つて苦しんで居り、そのうち重症のものは、すでに本心をすっかり失つてゐるし、あるものは軽症で心までは失つてゐないといふ風でした。

苦しみながらも、子供達は、遙かに父の帰る姿を見出し、皆非常に喜んで、両手をついて父の帰りを迎へ

『ようこそ遠い旅路を御無事で帰つて下さいました。私共は愚痴盲昧でありまして、誤つて毒薬をのみました。どうか憐愍を垂れておたすけ下さい、壽命をのばせて下さるやうに』

としきりに哀願いたしました。父なる医師は子供等の毒

斯うした暗く淋しい私の胸に、恰も燈台の放つ光明が、遠く暗夜の海面を照して、船舶に指針を与へる如くに、大きな輝きを持つた燈炬となつて下さるのが

『滅度を示現して、極済すること極りなし』
との大經序分の金言であります。

この聖語は、一代の御活動を終へ給うて、八十御入滅の佛陀の入涅槃の相を説かれたものであります。即ち佛は、滅度を示現せられて、それによつて限りなく人々をめぐまし、すくひにすくうて下さるといふことであります。

然し私共の世間普通の常識から申しますと『何時までも長生きして頂いて、何処までも御導きを蒙りたい。御亡くなりになられたのでは、どうして見やうもない』と云ふことから一歩も出られません。

それなのに『滅度を示現して、拯スグひすくふこと極り無し』と佛自ら仰せ下さることは、全く私共の常識ではかる

薬のために斯くまで苦しみ悶えてゐるのを見て、急いで種々の薬物を調べて、そのうち一番勝れた薬草をあつめ、色も香りも味ひも皆最上のものを選んで、その薬を調合して、早速子供達に与へて

『この高貴な妙薬は、色も香りも味ひも、皆悉く善美を極めたものであるから、早くこれを服用せよ。病氣は必ずなほり、病苦もしたががつて消える』

と申し添えました。父のこの勧めを聞いて、子供達の中で、幸いまだ心を失つてゐない者達は、早速妙薬を服用して、病は快く癒えましたが、すでに本心を失つた子供達には、父の帰りを見て非常に喜び、早く病を治療して下さいとお願ひはしましたけれども、父が苦心して調合してくれた高貴の妙薬を服用しようとしないう、それと云ひますのも、薬毒が深く身に入つてゐて、その本心を失つて了つて居るために、此の好き色、香り、美味の妙薬を『よろしからず』と思ひ込んでゐるからであります。

父は一向に薬を服用しようとしないう子供達を見て『この子供達は実に可哀想なものである。毒物のために心がすっかり顛倒して了つてゐる。父の姿を見て喜び、苦しい中から救ひを求めてゐるが、それはうはのそらで、妙薬を調合して勧めてゐるのに、一向にのまうとしない。どうかしてこの妙薬をのませて、速に病苦を除いてやりたいものであ

る』と、昼夜に深く念じ、種々に思案をめぐらした挙句に、未だ薬を飲まうとしない子供達を集めて

『子供達よ。自分はすでに老衰したから、程なく死ぬるであらう。然しこの妙薬はここに留めておくから、必ず服用しておくれよ。この薬の不思議な力できつと病氣は恢復し苦痛も解消する。これは父の遺言であるから、決して疑つてはならない、きつと忘れないで服用するやうに』

と懇ろに言ひ遣して、父は再び他国に旅立ちました。それから程なく、父の旅先から使者が来て

『お父さんは旅先でとうとう亡くなられました』と告げました。それを聞いた子供達は、ハッと驚くと共に、深い悲歎に沈んで、心に斯う思ひました。

『若し父が生きて居られるなら、常に我々を憐まれて、必ず救護して下さいに相違ない、嗚呼、然し父はすでに遠い旅先で亡くなつて了はれた。自分達はもう親なしのみなし兒になつた、誰れ一人として真に頼るべき人は無くなつて、これからは浮世の冷い風にさらされる身となつた。何といふ悲しいことか、何といふ痛ましいことであらうか』と。愛別離苦の悲しみに沈み、悲泣願恋の涙にくれました。けれども、この父を失ふといふ悲惨事が縁となつて、狂乱して本心までを失つた子供達の心が揺りさまされ、父が旅立つ寸前まで繰り返しまき返し言ひ遣された親の真実の思ひ召しが身にしみ、身の不孝を愧ぢると共に、色も香り

勞がなくてはならない、よき知識方の滅度示現の大悲によつて私共の信火が点ぜられて来る、さういふこと以外には微塵も驚けないしづとい身であるといふこともいよく照し出されるのであります。

憶ふに池山先生の生涯は、歎異抄二章のかなめ

『池山においては、ただ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひと、聖人の仰せを被りて信するばかりである』

を極味最上の本願醍醐の妙薬として常にくりかへして勸化して下されたのであります。

近角常音先生の生涯は、佛陀の至極を信証されて『我慢のやまぬのが可哀想である』

との至言を、微に入り細にわたつて、こゝ、一つが有難いのである、これひとつで人生手放しであると悲引して下さつたのであります。

実語、金言は昭々乎としてその御生涯をかけて、先生方が信証道味してお残し下されてゐるのであります。然し良医の譬通りに、斯る妙薬をお恵み頂いてゐるのに、先生の御存命中は、何時でも聞ける、先生は同じことを何時も繰り返されてゐると云ふ風にのんびんだらりと聞いて、よき

も味ひも善美を極めた妙薬を夫々に服用して、病氣が全快し、父の恩の深く広いほどをいよく謝しまつるやうになりました。

一方他国にあつて、子供達が本心に立ち帰り妙薬をのんで病の癒えたと聞いた父は急いで帰宅し、親と子は互に相抱いて非常によろこび合ひました。

譬諭の意味

この譬は、生身の佛は滅しても、法身の佛の壽命は不滅で測ることも出来ない、唯佛の出世といひ入滅と申されるのも、良医が旅から帰り、或は再び旅に出る如きもので、それによつて三毒の煩惱に狂ひ苦しむ者、邪教のために毒せられて惑ふ者をひたすらに救ひ遂げようための方便であつて、滅と云つても真の滅ではなく、ただ滅度を示して、無常なものを常なるものと思ひこんで怠惰放逸に流れて醉生夢死を繰り返す者をゆりおこし目覚まして下さるための大悲の至極であると知らされるのであります。

さて、今度、近角先生との別離、池山先生の十七回忌を迎へます私に、この譬諭が、そのまゝ、愚鈍の私に蒙むる大悲のまこととして深く信味され始めました。それと共に、斯うした真実味が極く僅かながらに私の心にひらけて参りますうらには、捨身の御苦勞が、さう云う生命がけの御辛人、よき教に遭ひ難く聞き難いことも、恭敬する心もおこらず、手ですることは足でするといふ風に放逸無慚におちて行くのであります。

斯様に、毒が全身にまはつて、本心まで狂ひ失つた私に、両先生とお別れ申す、先生方が捨身して下さることによつて、このしびれきつた身心をゆりさまし、驚ろかして下さるのであります。

恰もこの模様は親が死んでのちに、始めて親心の一分が子に徹し始める、親の存命中は常に温い親の覆護を蒙りながら、一向に身に感知出来ぬやうなものであります。

法華経の信解品にあります有名な『長者窮兒の譬』で、親をすて、放浪五十年の子を迎へ入れた親は、長い流転によつて卑賤になり果てた心身の垢を先づ洗ひ去つてやり、長者の百歳の時、親類縁者知人を招いて、その人達の前で親は全財産を子に譲るといふことになつて居ります。白杵祖山師は『それは譬であるから全財産を譲るといふことになつてゐるけれど、事實は、親の死の時、親の全生命が子に注ぎ込まれるのがほんたうである』と語られたと、福島先生から伝聞申して居ります。

『滅度を示現して、拯済すること極り無し』とは、私共にとりましては、よき師が、その全生命を瀝ぎ込んで下さることであると信知せしめられるのであります。

大經上卷の全体の感じ

福 島 政 雄

大經の会座に列する菩薩の徳を讃歎されてゐるところを味ひますと、菩薩は菩薩、凡夫は凡夫であります。同じ佛の光をうけて夫々のかがやきをもつてゐる、かう云ふ味ひが出て参ります。

ところが、こゝに、私共としてはその佛のまことに照される。人を殺さうと思ふ、傷つけようと思ふ、こうした種々の煩惱をおこして居りますが、そのおこしつづけて居ります煩惱の底の底に、その煩惱をはなれずに、法蔵菩薩の兆載永劫の修行、五劫の思惟といふものが私共に感ぜられるのであります。

つまり私共が五劫永劫の御修行を感じますのは私共の煩惱の深き強さに即して感ずるのであります。私共は随分強い煩惱を持つて居りまして、どれかが頭をあげつめて居りますが、そこをはなれずに、兆載永劫の御苦勞があるのであります。

それかと思ひますが、兆載永劫の菩薩の御修行はすでに申しましたと思ひますが、つまり自分は修行して居る非常にしづかに行はれてゐる、つまり自分は修行して居るぞといふ風な御顔は何処にも見えない、非常にしづかに私共のいのちの底の底にいば沈みこまれて、そこに兆載永劫の修行を行はれてゐる。五劫思惟の本願もそこにあるのであります。

それでは私共が、兆載永劫の御修行を私共の生活の何処で感ずるかと思ひますと、私共が欲をおこす、腹を立て

とが、すつかり親から支へられて生きてゐる、さう云ふ感じを腹の底に持つてゐるのであります。親がなければ自分も存在出来ない、さう云ふ感じを腹の底の底に持つてゐるのであります。けれども人間の親子は時々衝突します、劇しく争ひますけれど、あとは何も無い、それは心の底にこの親を離れては自分はないと云ふ感じを持つてゐるからであります。

何処までも見捨てないで下さる、それはさうでありませうが、それを極く表面から浅くうけまして、佛は有難いといふやうなことではありません。いよ／＼根本のところに向つて来ますと、言葉で言へない、せめて言つて見れば『佛様が有難いとも云へない有難さ』を味ふことであります。変なことを例で申しますが、私が京都に住んで居りました頃、上の娘が丁度女学校に通つて居りました。その子が急に『お父さん有難う』と何事につけても申しますので『どうしてさう云ふのか』と聞きますと『学校の先生からさう云へて教へられました』といふことであります。然し父としての私の気持からは、子が『有難う、有難う』と申しますと変な心がいたしました。

私共がそのところを、子の立場になつて考へて見ますのに、自分の全体が親から出来、親に支へられてゐる、さう云ふ自分を深く見つめると、有難うとも云へない有難さ、なまじい有難うなどと云ふと、親に対しての心が浅薄になると、私自身に考へさせられました。親子の間は、一つ一つ有難うといはぬが、何とも云へぬものがびびき合つてゐる、だから有難うとも云へぬ有難さがあるのであります。これは人間の親子として私が感じますことで、現在母親と息子や娘の關係を見て居りますとその通りで、娘や息子が、昨日も、今日も、事毎に有難うと云うては居りませぬが、すなほな心持で居ります時は、自分の生きてゐるこ

この人間の親子の關係のやうに、佛様と我々の關係もさうであります。一つ一つのことに、有難う御座います、南無阿彌陀佛とは申しませんが、煩惱ばかりの、苦しいとも云へない程の人生に生きて行きました、その苦しみの根本、煩惱の根本といふものを、佛の兆載永劫の修行によつてささへられてゐる、どうもさう云つたのではまだしつくりいたしません、どう申しますか、兆載永劫の修行に、そこから触れさせて頂いて、何となくそこに融けて行く感じを頂く、そこに南無阿彌陀佛と称名させられるのであります、それも必ず称名するとは限りませんが、自然とさうなる、しなくても、しても、煩惱のかたまりの苦惱を、永劫のひかりに触れて、何となく融かされて行くのであります。それも、そのやうに何時も感じづめではありませんが、さうなつてゐるのであります。煩惱の苦しみがしつこければしつこいほど、兆載永劫のひかりがよそごとでないと思ふ、それよりほかに兆載永劫の修行を感ずる方法はあ

りません。

昔々法蔵菩薩と云ふ方があつて、兆載永劫の修行をせられて阿彌阿佛となられた。その阿彌陀佛に救はれるのである、それを知る、即ちその佛にたすけられて居ることを知ればよい、と云ふ人々もありますが、さうではないのであります。

さういふことでは、四十八願も、阿彌陀佛も、神話か、造り話になつてしまふのであります。

さうでなく、私なら私の身に迫つた問題でありまして、

愚 禿 の こころ

これは私自身の謬想より起る、われは賢きものなりといふ、すくなくとも賢くならねばならぬといふ心から、事實は自身の願心を裏切つて、不可改の愚となり、なりつゝ、あることに対して、愚禿の心、即ち自己自照の愚禿を道味するものであります。

私自身が自照の鏡を曇らしてゐるために、自己の骨頂が

自己の進路を塞ぎ、自己を破壊に導く、これより恐るべきはありません。

これに反して自己を謙下し、他人を尊敬するの謙敬、正しき道を味ふの間、精進修行に進む奉行、これこそ眞に自照愚禿の心の歩みを持つ人のすがたであります。

これについて思ひ合はさるゝは、親鸞聖人が

『爾れば已でに、僧に非ず、俗に非ず、是の故に禿の字を以て姓と為す』

と愚禿の意味を自照せられ、この五十二歳の時のお言葉について、更に八十三歳の時のお言葉に

『賢者の信を聞て 愚禿が心を顯はす

賢者の信は、内を賢にして、外は愚なり、愚禿の心は、内を愚にして、外は賢なり。』

この句は上下二卷の愚禿鈔の卷首に、いはゆる巻頭言といふべき意味に於て、二卷おの／＼同じ文句を掲げられてあります。更に八十六歳の愚禿悲歎述懐に

『外儀のすがたはひとごととに賢善精進現せしむ

貧賤邪偽おほきゆへ

好詐ももはし身にみり』

とある和讃もともに仰崇して、聖人の御一代の歩一歩

兆載永劫の修行とは、私共の煩惱が無限にありますので、兆載永劫といふことが感ぜられるのであります。私共の煩惱をとりわけにして兆載永劫の修行を感じようとしたのでは感じやうがないのであります。煩惱を取りのけましては小説となり神話となつて了ひます。それはもつと私共の生活にさし迫つてゐる、有難いが、それは有難いとも云へぬ有難さであります。佛のまことが徹つて下さる有難さは、跳び上るほど、あまり有難いといふのではその感じが出て来ないのであります。さう云ふ風に兆載永劫の修行を私は感ぜしめられて居ります。

白 杵 祖 山

見えない、それで如何にも高処に大観してゐるやうに謬解をたくましくし、自己の眞面目が分らない、それで如何にも眞実に徹してゐるやうに誤想を續けて居ります。

これ全く自己を高振り、他人を見下す。僞慢、正しき道を蔽ひ、塞ぎ、破り、毀す弊、精進修行に背く懈怠、この三種の謬見より来るものにして、自己を暗闇におとし入れ、

が、常に、陥下四寸といふ脚下の重きに、五眼圓照、六通自明の目と足を傾注されたかといふことが尊とまれます。

『愚禿』とは聖人の独断的自称の名にあらずして、或る意味に於ては、大聖釈尊の自照の道味を信嘗されたものといはれ、また本師彌陀尊の『求道不止』の顯現ともいはれよう。

北本僧繫經、第三、金剛身品に云く。迦葉、衆に三種あり、一には犯戒雜僧、二には愚痴僧、三には清淨僧。今の愚禿の愚は、この經文の愚痴僧の愚を取りたまへることでありませう。

同經に云く。若し守護に隨逐する行者あり、まさに知るべし、是れ禿居士なり。

又云く。破戒不護法の人を禿居士と名づく。

又云く。我涅槃の後、濁世の世、国土荒乱し、互に相ひ抄掠し、人民飢餓せん、その時に多くは飢餓の爲の故に発心出家するものあらん、是の如き人を名けて禿人と爲す。

今の愚禿の禿は、これらの禿人、禿居士の禿を用ひたまへることであらうと思はれる。之について破戒不護法の人とは、持戒護法の精神を失つ

たもの、それは自己の天分を破壊せる自己破壊者である。

飢餓の爲の出家とは、求道に本心なく、徒らに自己を欺瞞し、世間を誑惑することの甚だしきもの、しかもその名聞を発心出家の美名に借りて、利譽を荒乱掠奪の中に貪る恐るべき人非人的行爲である。

守護に随逐するとは、信者の供養を逐ひ廻り、みだりに強要して施物を貪る、恐るべき虚受信施の罪人である。更に言ふならば孟子のいはゆる「東郭墦間の祭者にゆいて、その餘りを乞ふ」とあるに当るものである。

ここに深く思ひを致さねばならぬことは、自照者の愚痴僧、禿人、禿居士とは、その実際は清淨賢哲僧であり、また持戒護法の人であり、求道に本心を持つ、堅正不却の人であり、淨乞食の人であるといふことであります。

これに反して、自己に向つて無自覚であり、無批判である人は、自から返つて賢哲を誇り、自から自戒護法を任じ、自から求道の本心を表し、自から淨乞食を示すといふことほどに、その実際は愚痴であり、破戒不護法であり、求道に本心なく、信施を貪るものであります。

ここに於て、わが聖人が、一代九十年を通じて、愚禿と称せられたることは、全く自照自覚の愚痴僧であり、禿人禿居士であるとの、尊い光明の輝きを拜することが出来ません。

信に生き 信に死した人

長谷顯性

今日は二十七日だ。私の書齋のガラス窓越しに隣部落が見える。その中で一番近い家がKの家である。

私は今、K家の木立をみつめながら先年亡くなつたFさんのありし事共を思ひ浮べてゐる。Fさんは今日亡くなつたのだつた、あの時數へ年七十二だつたつけ。Fさんはまことに信に生き信に死した人であつた。あの人は今頃どうしてゐられるかしらん、夢の如く、現の如く、私はFさんの面影を追ふのであつた。

Fさんの亡くなつたのは一昨年の師走もさしせまつた二十七日だつた。その日は薄ら寒い日だつたが、雪もなく風もない静かな日だつた。長い病氣の苦痛に堪えて安らかに死んで行つたFさんの枕許で、美しい顔をみつめながら、阿彌陀經を誦しつつ「今現在說法」の經説さながらに、私は光に包まれてゐる感じであつた。

此に更に、わが聖徳太子の御意に就て見るに、太子は十七憲法に仰せられて

『彼かならずしも愚にあらざ、われかならずしも聖にあらず、共にこれ凡夫のみ』

とあるを拜しても、すべての人は、自己誇張の聖賢、自己増上慢の善人は、決して自からの人としての徳性を涵養發揮する所以のものでないことを教誡したまひ、また、太子御自身としての愚者の自照は、太子の法華經義疏に、諸法実相の御釈に於ては

『愚の心、およびがたし』

とありて、自から愚心なるを照して、不可思議の法を信嘗したまへる御心のほどを仰ぐにつけて、前聖後賢その揆一なり、といへるもの、また、明淨鏡の影、表裏をとほるが如きもの、或は、佛々相念の眞意のみち溢れるもの。これれしかしながら愚禿、凡夫、愚心の尊さである。

『その知には及ぶべし、その愚には及ぶべからず』

との聖人の語の今更らに道味の深きものを感じさせられます。

「あゆみの跡」より抄出。

あれからもう満二年になるのだなあ！あの年の七月も終り頃、私が久し振りでK家を訪れた時、Fさんは病氣でやつれた顔をして佛間に臥つてゐられた、胃痛も末期で、ただ死を待つばかりだとのこと、それでも気分がよい時は家の外へ出ることもあるさうな、病氣にかゝりながら、病氣にとらはれない態度にいたく心打たれたのでした。

「井波の太子伝絵」毎年七月下旬一週間に亘つて催される行事にまゐらうと久し振りに家に戻つたのですが、病氣が嵩じて休んでゐます」

その時、八月上旬私の寺で京都西京大学の西元完助先生の法話を聞くから気分がよかつらおまゐり下さいといふと、大そうよろこんで、是非まゐらせてもらひますと云つ

てをられた。それから十日後三日間の法話会に、その初日にFさんは元気にまゐりに來られた。病人らしく見えない位で「よく案内して下さつた」とお礼を述べて居られた。その日一日ゆつくりまゐつて、翌日も参らして貰ひませうと云つて歸られた。

けれども翌日も翌々日もFさんは顔を見せられなかつた。会がすんでから再びFさんの家を訪れるとFさんはその前よりはズント衰弱してをられるのが明らかに見受けられた。「この前私方におまゐりなかつたのが無理であつたんですね。すみませんでしたね、お勧めして却つて病状を悪化させたんぢやなかつたですか」と言ふと「いや、どうして。あんな結構なお話を聞かして頂きましたからは、病気が悪くなつたつて何でもありません。あなたはようこそあんな有難いお座を開いて下さつたね」と彼女は合掌して両眼に涙を浮べて礼をいはれる。あの嬉し涙の美しさ、今にも忘れることは出来ない。

そこで私はFさんが病苦になやんでゐられるとは思ひはかりながらも、信境の崇高なのにうたれて、どうしてそのやうになられたかをたづねずには居られなかつた。Eさんは言葉すくなに、自身の來歴を語られた。それは歎異抄に「ただ念佛して」といはれてゐることが、そのままそこに実現してゐるのであつた。彼女は全くすべてを如來様の御

君は金沢の有教な印刷業者に入婿して、一時大層羽振りをかかせてゐたが、多年の無理が祟つたせい胸を患つて、二三年の長患の後子供三人を残して死んでしまつた。Fさんの悲痛は如何ばかりであつたらう。H君の病気が悪化して難治とわかると、彼女の単に概念的の眞宗の信仰が何等の慰安とならず、病氣に対しては全く無力であつた。そこで彼女は法華宗の祈禱でなほさうとしたり、神がかりの宗教団に励んだりしたがすべてその効なく、遂に最後は天理教に入つた。それでもK君は遂に死んで行つた。

苦難は更に加つた。それはFさんの主人は義理堅い人であつたが、フトしたことから投機事業に興味を覚え、それが大失敗に終つて、先祖伝來の家財道具まで売り飛ばさねばならなくなつてから、自暴自棄となつて遊里に入り浸りのあけくの果に、悪病に感染し、家内喧嘩の絶え間もなく、隣人からは罵り嫌はれながら五十年の生涯を閉ぢてしまつた。師走の月ごもりであつたが、新年早々葬送の礼をすまずとすぐ病院に入院せねばならぬ彼女であつた。幸にして小康を得たが、これが更に彼女の天理教の信仰に没入せざるを得ない動機になつたらしい。

苦難は更に加つた。彼女の二女Kさんは小学校を卒へると東京で会社を經營してゐる叔父さんの許に引きとられ、數年間そこで働いてゐたが、機縁熟して郷里出身で東京高

はからひにまかせまゐらせて、力強い信の一念に立つてをられるのであつた。御口からまれる念佛の聲は、かすかで一才聞きとれない位だが、その念佛の響は十方にながれ、三世を超えて天地をゆり動かすものであらうと感佩した。この信境に到られるまでの道筋を簡潔に、何の修飾もなしに語るその言葉を通じて、自分と如何に長い間たたかひとほし、悩み続けて來られたかがうかがはれるのであつた。

前にも言つたが、Fさんはもう七十歳になんなんとしてをられるが、その求道の旅は夙に十五歳の頃に始つたのである。眞宗繁昌と云れる北越の法悦の環境にひたつて彼女は幼い時から佛法聴聞に熱心であつた。

厚信であつた両親の感化もさることながら、十六歳でK家に嫁してより婚家の舅姑や夫も信仰に志の篤い人であつたから、その感化を受けて開法の志は益々強くなつていつた。彼女の人生における苦難はそれに拍車をかけた。

それでも理智的で男まさりの気性であつたから、眞宗の教はた易いやうでしつかりのみ込めず、すくなからず苦しみ悩んだやうだつた。彼女の次男H君は私と小学校が同窓であつたので、私はよくH君のところへ遊びに行つて、Fさんが佛法聴聞の悩みを同行達に打ち明けてをられるのを子供心にも感じ入つたものだつた。後年にその次男坊のH等商船学校卒業の人で、大阪の某商船会社の旅客船の船長をしてゐられたSさんと結婚した。

ところが主人の外国航路就航の事情もあつて、Kさんは可愛い一人の坊やを連れて、実家に身を寄せることとなつた。然し都会生活になじみきつたKさんの生活振りは田舎の人々とそぐはなかつた。田舎の五月、田植時の忙しい際にK家からは三味線の音が聞えて來た。坊やを抱いて近くの町に買ひ物に出かけるKさんののんびりした姿は屢々近隣の評判となつた、又うらやましがられもした。あんな果報な娘さんはないといはれた。

ところが、その果報者のK家から時々大きな口論の強い聲が聞えて來ることがあつた。何のことかわからぬけれど察するに、こののんびんだらりの生活をしてゐる娘さんと多忙な他の家族とが調和しないところから、兄妹喧嘩、親子喧嘩となつたものらしい。

Kさんが何時だつたか偶然に井波の町へ私と一緒に行つたことがあるが、その時「主人が居ないものですからどうにもなりませんわ、ネエ坊や」と一寸淋しうに笑つてゐられたのを覚えてゐる。

その後どんな原因だつたか知らんけれど、そのKさんが気が変になつて妙なことを口走るといふ噂がたつた。なる程しばらくは噂らしかつたが、それは隠しきれなくなつた。あの美しいKさんは癡狂してしまつたのであつた。

その後二、三年Kさんの御主人もこの悲惨な事件が原因し
てか病気で急死せられた。

あとに残る狂つた娘と孫とをFさんはみななければならな
かつた、その心中は如何ばかりであつたらうか。ここにF
さんの迷ひは更に迷ひを重ねて、或は東に、或は西に、よ
いと云ふことは何でもやつて見た。然し幸か不幸か、その
何れもが無効に終つた。その間に自分は天理教の宣教師と
なり、自宅を宣教師所として活動し、ますます信仰に凝り固
つたけれど、何の効験もあらはれなかつた。

さうかうしてゐるうちにFさんは、ここに人間の如何な
る方途をもつてしても何とも爲し得ないもののあることが
気づかれて来た。そして若い頃聴聞してゐて、つまらぬこ
とだと見捨てたもとの教を改めて尋ね求めるやうになつて
来た。

けれども眞宗の教は何と難しいのであらうか。自分をす
てることは至難である。そのままかせよ、といふ教にと
うしてもつて行けないのである。

「何度信心が出来たりこはれたりしたか解りません。も
う今度こそはよろこんだ安心したとなつて又駄目になつ
た、出来た下から消え失せて、まただまされたかと青息吐
息、もう信心なんか出来やうもないとなげやりになつて見
たり、このままどうにもならぬのだとほのかになだめてみ

もしいことであらうか。

Fさんはこれより先、狂気になつた娘のKさんと孫とを
Sさんの本家の近くに一軒を借り世話をすることになつて
自分の家を十何年間も留守にしてゐたのであるが、長男G
君は四人の子持ちでありながら、何かのことで家を飛び出
し、東京方面に流れて行き、さつぱりたよりがない、孫さ
んは成人して嫁を貰つたが、家を捨てた父を恋ひ慕うて、
あちこちと尋ね歩き、北海道で父に逢ひ、一緒に暮さうと
勧めたけれど肯じなかつた。

こんな月日が約十年も続いたのであるが、Fさんは三年
ほど前やうやくお慈悲にめざめるやうになると、こんな親
子が相反目し、又別々に生活せねばならぬやうになつてゐ
るのも、宿業——いままではかり知れない昔より今日只今
まで自分のなして来た悪業のあらはれであつてみれば、今
どんなにもがいてみたとしてすぐに逃れられるものではな
かつたのだと知れて来た。いよゝこの宿業をのりこえさせ
て頂く念佛のおめぐみが尊くなつて来るのであつた。まこ
とに如来の御智慧は、身心の内外を照破して、苦悩の世界
にあつて、至徳の広海に衆禍の波を転じて徳となし給ふの
であつた。

Fさんは善も悪も凡てを念佛にまかせて生活して来たの
であつた。昨年胃の調子が悪いので診断をうけると胃癌も

たり、行きつもとどりつ、長い間苦しんで来ましたが、とう
とう宿善到来して、ただおまかせ申す許りの、しやはせな
身にならして頂きました。このどうにもならぬ自分ももう
用事のないことでありました、あなたのお慈悲のお心が念佛とな
していただくのでした。あなたのお慈悲のお心が念佛とな
つてこの私をよびよんでぬられるのでした。この私ほも
うどうしようかうしようといふことがいらぬのでした」

と語られるFさんの澄み切つた瞳、固く胸に組まれた両
手は苦悩を越えて、心は淨土に遊ぶ信境に外ならぬ。

「全く親様の私をたすけずばの御念力が強かつたので
す。如何にしづとい私も根氣負けしてしまつたのです」

その根氣負けするまでの苦悩は長いものであつた、眞宗
の教に感應するやうになつてかうも行きつ戻りつ、一進一
退、もう一息といふところが越せないでどんなになやんだ
ことか！

三恒河沙の諸佛の 出世のみもとにありし時
大菩提心おこせども 自力かなはで流転せり

自力のかなはぬことが頭にはわかつて、身には合点出
来ない、合点しよう／＼と力んで来た。今となつてやつと
自力のかなはぬことが知らされて流転をまぬがれて、佛の
み国へよび入れられたのであつた。何といふ有難くもたの

末期で手術も出来ないとのことであつた。このままではあ
と三月の壽命とのことであつた。もう死刑の宣告を受けた
身であるが、食物を食べると胃が痛むので、殆んど断食同
然にしてゐると何の痛みも感じない。でも何時かこの世が
終るのかと思ふと名残が惜しまれるけれど、何にも心配す
ることがないから身体は餘り衰弱しない。気が何時もせい
せいしてゐるので病人らしくないからである。

その日は心ゆくまで語り合つた。明日も期せられない身
といふので握手して別れた。縁があれば又ゆつくり話し
せうと云つて別れた。それは八月中旬のことであつた。あ
の時の感激は今もありありとおもひ出されて来るが、あら
はさうとすると意餘つて筆が足らない。

その次に訪ねた時は胃が痛むと云つて話も出来ず、お互
に合掌して別れて来たが、これが最後となつた。

Fさんはそれから二ヶ月後、師走のつもごりに亡くなつ
たが、もう二年の月日は流れた。

Fさんの長男G君は十幾年振りて老母の病床に帰り、狂
へる娘の子供は今天理教の宣教師として伝導してゐるさ
うである。私は今、はてしない業海の中に漂ひつつも、信
に生き信に死んで行つたFさんをなつかしみつつその光を
仰ぐのである。

二十九年、三月二十七日。

編集後記

残暑も朝夕の涼風に消されて爽涼の秋が参りました。お彼岸も近くなりました。花咲き鳥歌ふ春の彼岸と相違して、草も木もみのり、大気も澄み渡る秋こそ、信の歩みに最も好適の時でありませう。燈火の下に古聖の実話を拜し、静室に信友を訪うて道味を頌し「求道不止」の旅を進りませう。矢のやうに過ぎ去る一生涯に、よき時といふものは仲々得難いものであります。

△大經の御講話は、法蔵菩薩の兆載永劫の御苦勞について、聖人の常持語、彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。法味を、福島先生の御身にかけて、御話し下さいました。

「有難いともいへぬ有難さ」そこにこそほんとうのたのもしさを教へられます。先生の御住所は、東京都世田谷区世田谷町四丁目七二四。

△愚禿の心の臼杵老師の御遺稿は、太子と聖人の眞意を開顯して下された、貴重なもので、おのづと襟を正さしめられ、足下を照願させられます。

聖人の愚禿鈔は『教相判釈』であり

ますが、それは、己が智慧をたよつて照し分けるといふものでなく、身は愚禿に歸られて、その愚禿者を救ひたすけ照して下さる佛智をひとへに被られたの判釈であります。この点、世界に類例を見ないものであり、同時に、聖人が己が智慧才覚を捨てられて、眞実の謙虚の御心に自然と眞仮と権実が判別されて、間違ふにも間違へられなくなつて、そこひとつを永く後昏に残されたものであります。そこに人類の永劫の道が遠しらくひかりみなぎつて浮び出るのであります。

△信に生き信に死した人の長谷顯性さんの原稿は、佛弟子中、蓮華色比丘尼を連想するものがあります。業報のままに蜿々と右餘曲折を経て、遂に大海に注ぎこむ河川に似て、久遠のみ親のふところにやすらがる老婆の信境に「ただ念佛のみぞまことにしておはします」を信知せしめられます。

長谷さんは富山県礪波郡井波町宇繩之内に住まれ、赤尾の道宗のゆかりの地域にあつて、ひとすぢに信の道を歩んで居られます。

池山先生の著書、絶対他力と体験は紙型が一部駄目になつてゐたので出版

がおくれました由、丁子屋から申出がありました。いづれ近く再版されることとでありませう。

聚墨生記

昭和二十九年九月十日印刷
昭和二十九年九月十五日発行

定価 一年分 二百四(郵税共)

名古屋市南区駈上町二ノ二八

編輯兼 花田 正夫
発行人

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 奥川 正生

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所 千種印刷所

名古屋市南区駈上町三ノ二八

一 道会館
發行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番

慈光 第六卷 第九号 昭和二十九年九月十五日発行(毎月一回十五日発行)
昭和二十四年 七月二十三日 第三種 郵便物認可